定年退職のご挨拶

研究者人生の回顧とお礼

盛　田　清　秀

2022年3月、公立小松大学を去る時が来ました。大学の1期生と一緒に「卒業」することができてたいへんうれしく思っています。

私はもともと研究者になろうなどと考えたことはありませんでした。自分の才能の無さ、怠惰さをわかっていたからです。それで大学を出た1976年春、横浜市役所で働き始めました。そこである区役所の納税課に配属され、温かい職場の雰囲気に包まれながらこれといった不満の無い社会人生活を送っていました。ただ、「滞納処分」という租税徴収の最前線での仕事を通じて、1970年代前半という高度成長後の経済的な豊かさを享受する時代であっても、貧困や社会矛盾が普遍的に存在することを毎日目にするなかで、社会認識を深めたい、もっと学びたいという気持ちが芽生えたことが私の人生の一つの転機となりました。

当時はまだ、国家公務員試験を経て国立研究所の研究職になる途筋が私の専門分野（農業経済学）ではありましたので、そのルートで国（農林水産省）の研究所に入ることができました。1980年のことです。以来19年間、茨城県のつくば、広島県福山市、札幌市と移り住みながら、研究官としての調査研究に従事することとなったのです。その間の2年間は霞が関での研究管理業務（行政官）の仕事にも就きました。この行政官の経験は、個人的にはいろいろな意味で役に立ってはいますが、研究者としてはマイナスだったと言ってよいでしょう。同僚の中で私ほどの頻度で人事異動で研究所間を異動した人間はいなかったのではないでしょうか。おかげで、専門分野に関する理論的深化は果たせなかったと思いますが、全国津々浦々の農村現場については、その実態と課題、雰囲気が肌感覚として身に着いた気がします（気がしているだけかもしれませんが）。

でも、やはり、何かが不足していると思う気持ちもありました。農業問題もしくは経済学の新理論構築ができていない、専門分野における理論的貢献ができていない、という想いでした。そこで、お誘いをいただいたこともあって1999年、日本大学に移り、新しい環境で研究と教育に取り組むことになりました。大学というところでは、「すぐに役立つ研究」、「研究成果の普及」ということが常に問われた国の研究所と違って、理論的・基礎的研究も可能でしたからありがたく感じました。また、教育するということは、当該分野・領域に関する理論体系を踏まえた講義をす

ることがベースになりますから、どうしても自分なりの理論体系の構築に取り組まざるをえません。その点、大学での自由な研究環境は本当にありがたく感じられました。

ただ、日本大学で与えられた課題は、農業経済学ではなく、主に食料経済学でした。そのことで、多くの新たな経験と知見を得ることができたことはよかったといえますが、なにぶんゼロからのスタートということでなかなか研究実績を上げることができませんでした。

そうした中、定年も近い 2012 年に 59 歳で東北大学に移る機会を得たのです。東北大学は「研究第一」を前面に掲げる大学でしたし、また農学部に所属し、農業経済学での貢献を求められましたので、研究と教育の両面で新たなスタートを切ることができました。日本大学時代の最後の数年で構築しつつあった「世界農業類型論」の整理もそれでできたように思います。

そして東北大学で定年（65 歳）を迎えた 2018 年、新設の公立小松大学に縁あって採用していただいたのです。とはいえ、小松大学での講義科目はそれまでの大学と同じものがあまりなく、授業準備に多くの時間が必要でした。言い訳ですが、その分、どうしても研究面での進捗はあまりなかったといえます。それでも、2019 年晩秋に丸善から『農業経済学事典』（日本農業経済学会編）を編集委員長として出版できたことは、研究者生活の最後を飾るに足りる仕事になったと言えるかもしれません。もっとも、これがなければ「いったい何をやっていたのだ」ということになるでしょう。

ところで、公立小松大学の学生については良い意味でかなり強い印象を持ちました。彼らは優秀で、人間性が豊かで、一人一人が印象に残る粒ぞろいの学生だったと思います。研究者人生を終える段階で、このように大切に思える学生に出会えたことは、何よりのごほうびだったのではないかと、今あらためて思います。

そういう大学に職を得ることができたという幸運、そしてすばらしい同僚と学生の皆さんとともに、4 年間、共通の体験を得られたということに心から感謝したいと思います。

みなさまどうもありがとうございました。